

『デヴゲニイの事績』

— 物語の核をめぐって

福田 千津子

10世紀末、キエフ大公ヴラジーミル一世はキリスト教に改宗した。それを契機としてキエフ・ルーシのキリスト教化が始まり、瞬く間に多数のギリシャ語文献がルーシの地に流入した。これらのギリシャ語文献はあるものはビザンツの地で、またあるものは一足先にキリスト教を受容していた南スラブの地で、そしてまたあるものはルーシの地で次々と翻訳された。これらの翻訳活動の結果としてロシアの地にもたらされた文献の大半がキリスト教に関連したものであったことは当然のことであるが、同時に少数ながらも世俗的な内容を持つ文学作品が含まれていた。そういった世俗的な内容を持つ翻訳作品として最も早くロシア語に翻訳された作品の一つが本稿で取り上げる『デヴゲニイの事績』(Девгениево Деяние)である¹。この作品はディゲニス・アクリティスと呼ばれる英雄を中心として、10世紀頃の史実を背景にビザンツ帝国の東部国境地域を舞台として繰り広げられるギリシャ語の英雄叙事詩『ディゲニス・アクリティスの物語』をその原典としている。

この物語は、<ディゲニス> (二つの生まれを持つ) というタイトルのせいもあって、しばしばビザンツとアラブの抗争あるいは関係を描いた英雄叙事詩であるということが強調される²。確かに、物語の中に当時の東部国境線をめぐるビザンツ軍とアラブ軍の抗争を反映していることを窺わせる描写は数多く認められる。しかし、ボウラの言うように³、英雄詩の伝統においては、読者(聴き手)は一般にその英雄詩を<事実の記録>として受け入れるのが常であり、完全なフィクションとして創作するのは不可能であろう。この<ディゲニス物語>の場合もまた、読者にとって既知の歴史的事実の断片を舞台装置として物語の中に適宜ちりばめることにより物語に信憑性と普遍性を与えようとしたものと解釈すべきであろう。それでは、当時の読者の趣味嗜好に適い、幅

¹ 本稿で取り扱う物語はディゲニス・アクリティスとその父アミラスに関する記述文学として成立した物語であるが、そのロシア語に翻訳された物語を『デヴゲニイの事績』、ギリシャ語で残る物語を『ディゲニス・アクリティスの物語』と区別し、さらにロシア語、ギリシャ語にかかわらずこの物語全体の総称として<ディゲニス物語>を用いる。

² cf. Π. Καλοϊάρος, Βασίλειος Διγενής Ακρίτας, ; C. Saghas & E. Legrand, Les exploits de Digénis Akritas, Paris, 1875.

³ C. M. Bowra, *Heroic Poetry*, London, 1952, 548.

広い人気を集めた⁴この物語の本当の核はいったい何であったのだろうか。本稿では、『ディゲニス・アクリティスの物語』のプロトタイプを考える上できわめて重要な意義を持つとされるロシア語テキストとギリシャ語テキストとをモチーフという観点から比較対照することでこの問題を検討したい。

この物語のテキストとしては六つのギリシャ語写本（一つが散文写本で残りの五つは韻文写本）⁵と三つのロシア語写本（すべて散文写本）⁶が現存している。さらに、ロシア語写本としては、かつて『イーゴリ遠征の物語』と共にムーシン・プーシキン所蔵写本の中に含まれていて、1812年のモスクワの大火の際に消失したとされる写本が知られている。この写本自体はすでにこの世にないが、消失以前に出版された『イーゴリ遠征の物語』の注、およびカラムジンの『ロシア帝国史』にその一部抜粋が書き記されていることからその全体像が推定されている⁷。従って、この抜粋を含めると四つのロシア語写本が存在していることになる。

現存する六つのギリシャ語写本のうちトラπεζンダ、アンドロス、パスカリス、オックスフォードの四写本は酷似しており、同一の異本に遡ることが証明され、その共通に遡りうる異本の姿はすでにトラップによって異本Zとして再構築されている⁸。従って、本稿ではギリシャ語テキストに関してはトラップによって再構築された異本Z、グロッタ・フェラータ写本⁹、エスコリアル写本¹⁰の三種類のギリシャ語異写本を使用する。一方、現存するロシア語三写本に関しては、大きく二つのグループに分けられるが、いずれも同一の翻訳に遡るということで、すでに研究者の見解が一致している¹¹。そのうち、ティト

⁴ ギリシャにおいてディゲニス・アクリティスはアレクサンドロス大王と並び称される英雄として、現代ギリシャ文学においても好んで取り上げられるテーマとなっている。さらには、ディゲニス・アクリティスを主人公の一人とする一連のバラード群も存在し、これは最近までクレタ、ロードス、キプロスといった島嶼部を中心として歌われ続けていた。一方、ロシアにおいても、『プスコフ年代記』や『アレクサンドル・ネフスキー伝』などに残る言及から当時のロシア社会でのこの物語の人気を窺い知ることができる。

⁵ この物語が書かれたのはおおそらく10世紀半ばから11世紀半ばにかけての頃であろうと思われるが、これらの諸写本はその一つが14-15世紀とされる以外はすべて18世紀頃に書き換えられたものとされ、書かれた当時の姿をそのまま伝えるものはない。

⁶ ティホヌラーヴォフ、ティトフ、ボゴージンの3写本で、いずれも17-18世紀の写本とされている。

⁷ これは現存するロシア語三写本のうち、ティホヌラーヴォフ写本に最も近い。

⁸ E.Trapp, *Digenis Akrites: Synoptische Ausgabe der Altesten Versionen*, Wien, 1971.

⁹ カロナロス、マヴロゴルダトの刊本を使用した。Π.Καλονάρος, *Βασίλειος Διγενής Ακρίτας*, Athens, 1941.; J.Mavrogorodato, *Digenes Akrites*, Oxford, 1956.

¹⁰ アレクシウによる刊本を使用した。Σ.Αλεξίου, *Βασίλειος Διγενής Ακρίτας και το άσμα του Αρμούρη*, Crete.

¹¹ cf. М.Сперанский, "Девгениево Деяние", *СОРЯС*, Petrograd, 99.7, 130; S.Kyriakides, "Forshungsbericht zum Akritas-Epos", *Berichte zum XI Internationalen Byzantinisten Kongress II*, 14;

フ、ポゴージン写本のグループはすでにクズミナによって第二異本として再建され、提示されている¹²。筆者はこの第二異本に、ロシア語アーキタイプ本来の姿をもっともよく留めるとされるティホヌラーヴォフ写本を加える形で想定写本X'を再建し¹³、この想定写本X'をギリシャ語写本との比較検討に使用する。

異写本により、その含むモチーフの数、あるいはその大きさは異なるが¹⁴、全体の物語は大きく分けて次の10のエピソードから成立する¹⁵。

- E1 ディゲニスの母イリーニの誕生にまつわる予言
- E2 ディゲニスの父アミラスによるイリーニ略奪、その兄弟による妹の追跡、アミラスの改宗、結婚
- E3 ディゲニスの狩
- E4 アペラティス訪問
- E5 ストラティゴスの娘エフドキアとの出会い、略奪、兄弟による追跡、ディゲニスの勝利、結婚
- E6 皇帝との出会い
- E7 アプロラヴドスの娘の話
- E8 泉のほとりでの冒険、マクシモとの闘い
- E9 宮殿と庭園の描写
- E10 ディゲニスの死

さらにこれらの10のエピソードを構成する下位区分として次の35のモチーフを考えることができよう。

- M1 カップアドキアのアンドロニコス・ドゥカスとアンナの間に誕生する娘イリーニへの予言、イリーニの誕生、屋敷内への幽閉
- M2 父が留守の間にピクニックに出かけるイリーニ
- M3 イリーニを誘拐するアミラス・ムスール
- M4 兄弟たちの追跡
- M5 末弟コンスタンディノスとアミラスの一騎打ち、コンスタンディノ

В.Кузьмина, *Девгениево Деяние*, Moscow, 1962, 101-111/

¹² В.Кузьмина, *ibid.*

¹³ これはモチーフという観点からすると、現存する三写本に残るモチーフをすべて包括した形となっている。これについては1992年度東京大学に提出した博士論文で詳述した。

¹⁴ 特に、ギリシャ語テキストとロシア語テキストでは、含まれているエピソードの数に大きな隔たりがある。

¹⁵ エピソードの順序はギリシャ語テキストに登場する順に従った。

スの勝利

- M6 兄弟たちによる妹の探索、アミラスの求婚、改宗、結婚
- M7 ディゲニスの誕生
- M8 アミラスの母の手紙
- M9 アミラスの母からの使者の到来を告げる夢、アミラスと兄弟たちとのいさかい
- M10 シリアへ旅立つアミラス
- M11 アミラスの母と一族の改宗、ドゥカスの館への帰館
- M12 アミラスの武勇
- M13 ディゲニスの幼時の教育、最初の狩
- M14 アペラティスに憧れるディゲニスとアペラティスの首領フィロパボス訪問
- M15 ストラティゴス・ドゥカスの娘エフドキアとのロマンス、誘拐
- M16 エフドキアの兄弟たちによる追跡、闘い、ディゲニスの勝利
- M17 ディゲニスとエフドキアの結婚と嫁賜のリスト
- M18 辺境でエフドキアと暮らすディゲニス
- M19 コックを盲目にするモチーフ
- M20 皇帝との出会い
- M21 アプロラヴドスの娘の救助（ディゲニスの自慢話）
- M22 五月の描写（譬）
- M23 泉のほとりでの冒険（竜退治と獅子退治）
- M24 三人のアペラティス、フィロパボス、キンナモス、ヤナコスとの闘い
- M25 アンギラスの話し
- M26 エフドキア誘拐計画、マクシモの登場
- M27 ディゲニスと三人のアペラティスとの闘い、マクシモとの決闘、マクシモの再挑戦
- M28 マクシモとの二度目の決闘、ディゲニスの勝利、エフドキアのもとへ帰還（ディゲニスの自慢話が終了）
- M28a マクシモ陵辱
- M28b マクシモ殺害
- M29 ユーフラテス川のほとりにあるディゲニスの庭園と宮殿の描写
- M30 父の死、母の転居

- M31 母子三人の生活、母イリーニの死
 M32 ディゲニスの過去の栄光への言及
 M33 病に倒れるディゲニス
 M34 死の床でのエフドキアとの対話、二人の死
 M35 二人の葬儀と弔問

次に、ギリシャ語、ロシア語テキストでこれらのモチーフの有無を調べると次のような結果が得られる(表1)¹⁶。

表1 写本別にみたモチーフ一覧表

	Gr	Z	E	X'
M1	×	1-246 (5.4)	×	×
M2	×	247-267 (0.5)	×	×
M3	1-33 (0.9)	268-284 (0.4)	×	7-45 (2.9)
M4	34-131 (2.7)	285-301 (0.4)	1-8 (0.4)	46-209 (12.2)
M5	132-168 (1.0)	302-361 (1.3)	9-52 (2.4)	212-242 (2.2)
M6	169-308 (3.8)	362-532 (3.8)	53-208 (8.4)	243-435 (13.1)
M7	309-357 (1.3)	533-585 (1.2)	209-216 (0.4)	512-521 (0.8)
M8	358-441 (1.3)	586-708 (2.7)	217-308 (5.0)	436-467 (2.2)
M9	442-567 (3.4)	709-848 (3.1)	309-455 (7.9)	468-502 ¹⁷ (2.4)
M10	568-608 (1.1)	849-868 (0.4)	456-475 (1.1)	×
M11	609-951 (9.3)	869-1242 (8.3)	476-601+609 (6.8)	×
M12	952-998 (1.3)	1243-1308 (1.4)	602-639 (2.0)	×
M13	999-1204 (5.6)	1309-1547(5.3)	640-703 (3.5)	522-695 ¹⁸ (12.6)
M14	×	1548-1629 (1.8)	704-784 (4.4)	×
M15	1205-1546 (9.3)	1630-1965 (7.4)	785-909 (6.7)	860-1093 (16.3)
M16	1547-1806 (7.0)	1966-2210 (5.4)	910-1059 (8.1)	1094-1179(5.6)
M17	1807-1903 (2.6)	2211-2258 (1.1)	1060-1080 (1.1)	1180-1271 (6.8)

¹⁶ 比較にあたってギリシャ語グロッタ・フェラータ写本(Gr.)はカロナロスおよびマヴロゴルダトによる刊本を、エスコリアル写本(E)はアレクシウによる刊本を、Z異本はトラップによる刊本を各々使用し、表中にある数字はすべてトラップによる刊本中の行数で統一した。また、ロシア語のテキストは筆者による想定写本X'による。ロシア語写本中数字がとんでいる部分はタイトル部分を示す。括弧内はパーセンテージを示す。

¹⁷ ロシア語写本では、この夢は後の見る夢として描かれる。

¹⁸ ロシア語写本では、この狩のエピソードの最後のシーンに、泉に水浴に行ったデヴゲニがそこで竜と出会うというモチーフが挿入される。

M18	1904-1921 (0.5)	2259-2279 (0.5)	×	1271-1281 ¹⁹ (0.9)
M19	×	2280-2300 (0.5)	×	×
M20	1922-2044 (3.3)	2301-2402 (2.3)	×	1286-1432 ²⁰ (11.4)
M21	2045-2333 (7.9)	2403-2742 (7.5)	×[1081-1082] ²¹	×
M22	2334-2344 (0.3)	2743-2757 (0.3)	×	715-722 ²² (0.7)
M23	2345-2506 (4.4)	2758-2953 (4.3)	1083-1187 (5.7)	647-656 ²³
M24	2507-2532 (0.7)	2954-2988 (0.8)	1188-1226 (2.1)	×
M25	×	2989-3042 (1.2)	×	×
M24	2533-2643 (3.0)	3043-3164 (2.9)	1227-1306 (4.3)	×
M26	2644-2808 (4.5)	3165-3349 (4.1)	1307-1411 (5.7)	×
M27	2809-3046 (6.5)	3350-3613 (5.8)	1412-1542 (7.1)	702-847 ²⁶ (10.5)
M28	3047-3138 (2.5)	3614-3754 (3.1)	1543-1595 (2.9)	×
a)	×	3699-3754 (1.2)	1577-1595 (1.0)	×
b)	3127-3132 (0.2)	×	×	×
M29	3139-3246 (2.9)	3755-3954 (4.4)	1596-1683 (4.7)	×
M30	3247-3294 (1.3)	3955-4063 (2.4)	×	×
M31	3295-3367 (2.0)	4064-4136 (1.6)	×	×
M32	×	4137-4218 (1.8)	×	×
M33	3368-3430 (1.7)	4219-4263 (1.0)	1684-1761 (4.2)	×
M34	3431-3566 (3.7)	4264-4416 (3.4)	1762-1855 (5.0)	×
M35	3567-3681 (3.1)	4417-4526 (2.4)	×	×

この表から明らかなように、三つのギリシャ語テキストとロシア語想定写本 X' との間にはモチーフの有無に関して顕著な差異が認められる。ギリシャ

¹⁹ ただし、ロシア語写本では具体的に国境地域に移り住むといった言葉はない。

²⁰ ロシア語写本ではこのエピソードの内容はギリシャ語写本と全く異なり、デヴゲニイが皇帝を征服する話となる。

²¹ 一行だけ言及されている。

²² ロシア語写本ではこのモチーフはマクシモの手紙の中で言及される。

²³ ただし、ここで語られるいくつかのモチーフのうち、10行分すなわち竜退治の話だけは狩のエピソードの最後のシーンに挿入されている。

²⁴ ロシア語写本の最後、すなわち皇帝とのエピソードの最後にカンナ、ヨアキムという名前が捕虜として登場する。そのことから、本来プロトタイプの中にもこの二人が関与した形で語られていたことが推量される。

²⁵ ロシア語写本ではマクシモは次のエピソードの中に登場する。

²⁶ ただし、ロシア語テキストではこのマクシモとのエピソードはこの位置ではなく M14 の位置で語られる。

²⁷ ただし、両親の死への言及はある。

語テキストでは異写本によりいくらかの異同はあるものの、大筋としては35のモチーフの大半を含む形で全体の物語が成り立っている。それに対して、ロシア語想定写本X'ではM20の皇帝のエピソードまではギリシャ語テキストとほぼ一致する形で物語が出来上がっているが、このエピソードで物語が完結しており、M21以下のエピソードはその前のエピソードの中に含まれる形で言及がなされていることを除いては語られていない。すなわち、上記のモチーフのうち、M1、M2、M10、M11、M12、M14、M19、M21、M23-M26、M28-M35がロシア語テキストから欠落していることになる²⁸。このことは物語全体で35のモチーフのうち20のモチーフがロシア語テキストの中では語られていないということを示している。しかも、ロシア語テキストで欠けているこれらのモチーフがギリシャ語写本に占める割合は決して少なくない²⁹。現存するギリシャ語写本で語られている話の約半分がロシア語テキストでは語られていない。このことはいったい何を意味するのであろうか。ロシア語への翻訳の際に依拠したギリシャ語テキストにはこれらのモチーフが存在していたのであろうか。そうだとすると、何故それがロシア語訳の際に省略されたのであろうか。それとも、これらのモチーフは本来の『ディゲニス・アクリティスの物語』のプロトタイプには存在せず、ギリシャ語異本の後代の書き換えの際に追記されたものなのであろうか。

ここで物語の構成に目を転じてみよう。この物語はディゲニスの父となるアミラスを中心とした物語（第一部）とディゲニス本人の英雄譚（第二部）という二つの物語から成り立つ二部構成の形をとっている³⁰。

第一部の主人公はアミラスである。アラビアの地の王アミラスはギリシャ人ストラティゴスの娘イリーニの美しさを聞き、ギリシャの地で略奪を行い、娘を誘拐しようとして企てる。そこで、父親や兄弟たちの留守の間に³¹カルシアンを通り、カッパドキアに至ってストラティゴスの館に大挙して乗り込むと、館に居合わせた者を皆殺しにしたうえで、美しい娘を捕えて立ち去る³²。その後、妹を奪回すべくアミラスの所までやって来た兄弟たちとの一騎打ちが行われ、敗れたアミラスは改宗して、その娘と結婚し、二人の間にアラブ人とギリシャ

²⁸ ロシア語、ギリシャ語テキストのいずれにも登場するモチーフに関しても両者がかなり近い形で語られるものとその一部のみが語られるものがある。

²⁹ グロッタ・フェラータ異本の場合で49.4%、Z異本では55.5%、エスコリアル異本では49.1%。

³⁰ この二つの部分の持つ重要性に初めて注目し、指摘したのはおそらくベックであろう。

H.G.Beck, "Formprobleme des Akritas-Epos", *Ideen und Realitäten in Byzanz*. London, 1972.

³¹ ロシア語テキストでは、この娘は一人の敬虔な寡婦の娘として語られる。しかし、ギリシャ語テキストでは、娘の父親はその時追放の身で、兄弟たちもまたアクリティスとして国境警備について留守をしていたことになっている。cf. Gr. I 63, Gr. I 64.

³² cf. Gr. I 56-61.

人の血を受けた息子ディゲニスが誕生する。ここで語られるのはあくまでアミラスをその主人公とする花嫁略奪の物語で、アラブ側からの視点に立った物語が展開される³³。

花嫁略奪をその主題とする物語はビザンツ文学の一つのジャンルをなし、花嫁略奪を歌う民謡はバルカン一帯に広く知られている³⁴。これはおそらく、一家にとって重要な働き手である娘の結婚にあたってその損失に見合うだけの金品を保証するという<花嫁買い>³⁵、あるいは花嫁側から贈る嫁賜の習慣に係るものであろう。結婚は家同士の純粋な経済取引であり、金品の交換を伴うのは当然であった³⁶。そこで、これらの金品が調達できない者の場合には花嫁略奪という形での結婚が行われ、さらに、真の意味での略奪ではないが、相互の暗黙の了解の上での略奪が行われることもあった³⁷。また、<ディゲニス物語>と共通の源泉を持つと考えられる<アクリティカ・トラグディア>にも花嫁略奪の歌が知られる³⁸。

一方、第二部では、そのような経緯で誕生したディゲニスが、幼時から傑出した偉業を示し、成人してからも多く武勇を発揮した上、美しい娘エフドキアを誘拐し、結婚するという物語が語られる。しかし、第一部の主人公が父アミラスであるのに対して、第二部の主人公は息子ディゲニスである。しかも第一部の最後に次に語られるディゲニスの英雄譚の前触れがあり、第二部の冒頭部分に父アミラスの思い出に言及されているということを除くと、両者の間にそれ以上の相互浸透はほとんど見られないことや、各々の部に反映する史実にも時代的な隔たりが見られることなどを考え合わせると、これらが本来独立した二つの物語であったものを、<ディゲニス物語>成立の際に繋ぎ合わせられたものであると考えてもさほど無理はないであろう。

³³ この物語が本来アラブ起源のもので、類似の物語がアラブ世界に存在することが多くの研究者によって指摘されている。cf. M.Canard, "Delhemma Sayyid Battal et Omar Al-Noman", *Byzantion* 12, 183-188, V.Christides, "Arabic Influence of the Akritic Cycle", *Byzantion* 49, 94-109, H.Grégoire, *Digenes Akritas*, New York, 1942, 142-155..

³⁴ 例えば、ユーゴスラヴィアの婚礼歌は花嫁略奪の型をとるのが一般的であるとされる。W.J.Entwistle, "Bride-snatching and the Deeds of Digenis", *Oxford Slavonic Papers* VI [1953], 13.

³⁵ この代表的な形態の一つが、婚礼の翌日花婿側から与えられる *θεώρετρον* と呼ばれる贈り物で、『ディゲニス・アクリティスの物語』の中でも言及されている。Gr.IV 915.

³⁶ ギリシャでは花嫁売買の習慣は1940年代まで存在したとされる。また、婚礼歌の中にも具体的な金額などが歌い込まれている例が挙げられる。E.P.Alexakis, *Η Εξαγορά της νύμφης*, Athens, 1984, 35, 40.

³⁷ 普通の婚礼でも一種のセレモニーとして花嫁略奪の儀式が採り行われる習慣を持つ地域もある。

³⁸ "Η αρπαγή της κόρης του Λεβάντη από τον Διγενή Ακρίτα.", "Η αρπαγή της Ρήνης.", "Η αρπαγή της κόρης.", "Η αρπαγή της γυναίκας του Κωνσταντά." といったタイトルで知られる。cf. V.Makis, *Δημοτικά Τραγούδια, Ακρίτικά*, Athens, 1978.

ところで、大半のギリシャ語テキストには³⁹二部構成になっているということの他にロシア語テキストには見られない構成上の大きな特徴がもう一つある。ギリシャ語テキストではM20のエピソードまではロシア語テキストの場合と同様に第三者（作者）の語る物語として英雄譚が語られているが、M21からM28までは主人公自身の口を通じて語られる＜一人称の語り＞による自慢話で、回想シーンの形態をとっている。その後、M29から最後まで再び第三者の語りに戻り、三人称の語りによる物語の間に一人称による語りが挿入されるという文学的手法が採用されている（図1）。

図1

第一部	三人称による語り	M1-M12
第二部	三人称による語り	M13-M20
	一人称による語り (ディゲニスによる回想)	M21-M28
	三人称による語り	M29-M35

■ ロシア語、ギリシャ語テキストに共通する部分

図1に示した物語の構成と表1の写本別にみたモチーフ一覧表に従ってロシア語、ギリシャ語テキスト間の対応関係をみると、ギリシャ語テキストにのみ用いられる＜一人称による語り＞を用いた回想シーンから先のモチーフ（M21以下）はロシア語テキストではまったく語られていないか、あるいはM20までのモチーフの中に含まれる形で語られているということがわかる。さらに、これらのモチーフを検討するといくつかの特徴が明らかになる。まず、一部のモチーフ（M1,M2,M19,M25,M32）はロシア語テキストに欠けているだけでなく、ギリシャ語写本でもZ異本にのみあるモチーフで、グロッタ・フェラータ写本およびエスコリアル写本には登場していない。しかも、他の部分との間に多くの矛盾点を露呈していることが多くの研究者たちによって指摘されており⁴⁰、おそらくはZ異本編集の段階で、Z異本の編者であるエフスタ

³⁹ オックスフォード写本では＜一人称による語り＞の形式はない。

⁴⁰ cf. H.Grégoire, "Le Problème de la version 'originale' de l'épopée byzantine de Digénis Akritas", *Revue des études byzantines* 6.1, 30, "Notes on the Byzantine Epic", *Byzantion* 15, 97-99; M.J.Jeffreys, "The Astrological Prologue of Digenis Akritas." *Byzantion* 46; J.Mavrogordato, *Digenes Akrites*, xvi; L.Politis, "L'épopée byzantine de Digénis Akritas.", *Atti del Convegno*

シオスによって追記されたのであろうと考えられている⁴¹。また、構成上の理由から挿入されたと考えられるモチーフ（M12）、あるいは後代のロマンスの流行に影響されて挿入されたとされるモチーフ（M29）、あるいは物語のエンディングをよりドラマティックにしたいという編者の意図を示すモチーフ（M30-M35）⁴²など明らかに後代の追記と見做されるものもあるが、何よりも興味深いのはM14とM24、M26、M27、M28との関係であろう。これらのモチーフはフィリパパとマクシモに関するエピソード（E8）に関するものであるが、ロシア語とギリシャ語のテキストではその構成およびモチーフの有無だけでなく、その挿入されている位置も大きく異なっている。

ロシア語、ギリシャ語テキストの展開は次のようになる。

<u>ロシア語</u>	<u>ギリシャ語</u>
<u>M14</u>	<u>M14</u>
—	老フィリパポス訪問とその試練 に打ち勝つディゲニス
—	<u>M22</u>
フィリパパとマクシモの出陣	草原のエフドキアとディゲニス
マクシモからの書簡（五月の譬）	5月の譬
デヴゲニイの返書	—
マクシモからの書簡	<u>M24</u>
デヴゲニイの出陣	三人のアペラティス（フィロ パポス、キンナモス、ヤナコ ス）との闘い、勝利
ユーフラテスを挟んで対峙	—
デヴゲニイの使者	<u>M26</u>
—	マクシモにエフドキア誘拐を依

Internazionale sul tema : La poesia epica e la sua formazione, 1970, 563-565; E.Trapp, *Digenis Akrites Synoptische Ausgabe der Altesten Versionen.*, 24-26.

⁴¹ cf. M.J.Jeffreys, *ibid.*, E.Trapp, *ibid.* 特に、ジェフリーズはこの予言について詳細な検討を加えた。その結果、基本的にはグレゴワール、トラップの見解を支持した上でさらにそれを一層補強して、この部分が追記された経緯を示した。

⁴² H.G.Beck, *Geschichte der byzantinischen volksliteratur*, München, 1971, 142-143. また、このディゲニスの死のモチーフはアクリティカ・トラグディアでは広く知られる。H. Grégoire, *Digenes Akritas.*, 244-248.

—	頼するフィロパポス マクシモの承諾、メリミツェス と参加
	M27
フィリパパの出撃	フィロパポスを先頭に出陣
一騎打ち、デヴゲニイの勝利	レアンドロス、キンナモス、 ヤナコスの参加
マクシモとの闘い、勝利	マクシモとの一騎打ち
フィリパパによるストラティゴ ヴナへの言及	マクシモの命乞い
—	他のアペラティスたちを追 い払うディゲニス
—	マクシモの再挑戦
—	天幕へ
—	M28
	二度目の一騎打ち
マクシモの求婚	マクシモの求婚
デヴゲニイの拒絶	ディゲニスの拒絶
フィリパパとマクシモを捕虜に 帰宅	マクシモの陵辱 帰宅
—	エフドキアへの告白

ロシア語テキストに比べ、ギリシャ語テキストでは数多くのモチーフが含まれ、それらが拡大されているために、一見したところ両者の間の共通点は少ないように思われる。しかし、実際にはギリシャ語テキストにあるM24、M26のモチーフはマクシモ登場の理由付けとして用いられており、ロシア語テキストではこの部分は「ディゲニスの勇名を耳にして」とだけ簡潔に述べられる。モチーフM27、M28での両者の違いは、マクシモとの再挑戦があるかどうかということで、ギリシャ語の最後にあるエフドキアへの告白はロシア語テキストではそもそもこのエピソードが結婚前の話となっているので存在しないのは当然であろう。このように考えるとこのエピソードはディゲニスとマクシモの一騎打ちを中心に、それにいたる理由とその結末といった三つの部分から成り立ち、両テキストの差はマクシモが登場する理由とエピソードの位置というこ

とになるろう。

ところで、ロシア語のテキストで、敗れたフィリパパはデヴゲニイに"И есть у него дочь вельми преславна а прекрасна Стра[ти]говна, имеет мужескую дерзость и храбрость, а красотою ея несть на свете краше". (彼には非常に美しく、誉れ高き娘、ストラティゴヴナがいる。この娘もまた男勝りの剛胆さと勇敢さを備え、その美しさはこの世に比類なきものだ)とストラティゴヴナの存在を教えることで命乞いをし、ストラティゴヴナ略奪の仲介者としての役割を担っている。また、ポゴージン写本ではさらに加えて、"разве тебя Бог оларит" (神がお前に下さるやもしらん。)という一行が挿入され、フィリパパの幫助者としての姿がより鮮明になる。従って、ロシア語写本の展開ではフィリパパのエピソードは必然的にストラティゴヴナのエピソードの前に来なければならない。また、それに対するディゲニスの返答 "Хошу проведати, аще истину глаголеши, тогда пушу тя" (お前が本当のことをいっているかどうか確かめよう。そうであれば、放免してやろう。)は、ストラティゴヴナとの婚礼が終わった後のデヴゲニイによるフィリパパとマクシモに対する処遇 "А самому Филиппе стрью возложу пятно на лице и отпусти его во своясы, а Максиме подасть свободу своими предстатели" (ただ、叔父のフィリパパ本人は顔に烙印を捺してから自分の家に帰した。マクシモには自分の側近を通じて自由を与えた。)と対応関係を示している。このように、ロシア語テキストの展開は完全に首尾一貫しており、エピソードの順序の入れ換えは考えにくい。

それに対して、ギリシャ語テキストではM14の位置でディゲニスによるフィロパpos訪問が語られる。アペラティスの長、老フィロパposを訪れ、様々な試練を苦もなくやりこなしてフィロパposを感嘆させる話であるが、M22以下のモチーフとは起こった時も場所も全く異なる独立したエピソードとなっており、両者の間に直接的なつながりはない。両者の共通項はフィロパpos、ヤナキス、キンナモスという三名の登場人物だけである。しかも、M22以下では再会となるはずのフィロパposとディゲニスはあたかも初対面であるかのように描写されており、首尾一貫性に著しく欠けていることは否めない⁴³。

さらに、ロシア語テキストではデヴゲニイのストラティゴヴナ略奪にあたってフィリパパが助言者として重要な役割を果たしているわけであるが、このフィリパパの指示に従って略奪が成就されるというモチーフはアクリティカ・トラグディアにも知られ⁴⁴、このモチーフは『ディゲニス・アクリティスの物語』と<アクリティカ・トラグディア>双方が共通して遡る源泉の姿を示唆するものであろう。従って、ロシア語テキストの示すようにモチーフM14の位

⁴³ ギリシャ語テキストの第二部の首尾一貫性の無さに関してはベックも指摘する。H.G. Beck, *Geschichte der byzantinischen volksliteratur*, 143

⁴⁴ cf. H. Grégoire, "Le Digénis russe", *Russian Epic Studies*, 153.

置にこのエピソードが挿入される方がプロトタイプ本来の姿により近いと考えられる。そして、この位置が正しいければこれはエフドキアとの結婚よりも前の出来事であり、ギリシャ語テキストにあるマクシモ登場の理由付け(M26)、すなわちマクシモにエフドキア誘拐の助力を乞うという設定が崩れ、M26もプロトタイプ本来のモチーフから外れることになる。また、同じ理由でエフドキア誘拐に絡む三人のアペラティスとの闘い(M24)も本来の形ではないと考える。おそらくM14のモチーフは<一人称の語り>による編集が行われた際に追記され、本来のエピソードの位置の名残りととどめる位置に挿入されたと考えられる。

また内容的にも、M20すなわち一人称の語りが始まる前で、物語が一応の完結をみている。そこまでで、英雄の誕生 — 小さな子の偉業 — 結婚 — 終末(引退)という、およそ英雄の生涯の物語に必要な不可欠な要素は全て語り尽くされている。さらには、ギリシャ語テキストの中でディゲニスの<引退>を暗示するような言葉が挿入されていることなども本来は<引退>がこの物語の最終的な終結であったことを裏書きするものといえよう。

このように、個々のモチーフに関する内容面からの比較検討からも、さらには物語の構成に関する形態面の比較検討からも、35のモチーフのうちロシア語テキストに語られていないモチーフの大半は後代の追記部分で、本来の物語には存在していなかったことは疑う余地はないであろう。すなわち、現存するギリシャ語諸写本の遡る異本の編者は誕生 — 小さな子の偉業 — 結婚 — 引退というすでに完結した英雄物語を手にして、さらに多くの武勇伝をつけ加えるために一人称の語りという手法を創作し、しかも全体を再度終結させるために英雄の早逝というより悲劇的なモチーフ⁴⁵を利用したものと思われる。

ここでエピソードという点に戻ると、現在残っている10のエピソードのうちE1、E4、E7、E9、E10のエピソードが後代の追記部分、言いかえると<ディゲニス物語>のプロトタイプにあったと思われる本来のエピソードはE2、E3、E5、E6、E8であるということになる。このことはまた、類似のテキストであるグロッタ・フェラータ異本と異本Zの間に⁴⁶分量的に大きな差があることの説明にもなる。グロッタ・フェラータ異本は3681行であるのに対し、Z異本は4526行と二割以上大きなテキストとなっている⁴⁷。しかし、両方のテキストの中から本来のエピソードに相当する部分を抜き出すとその行数は

⁴⁵ このモチーフはアクリティカ・トラグディアに残る。H. Grégoire, *Digenes Akritas*, 244-248.

⁴⁶ エスコリアル写本は口語的あるいは口承詩的特徴を示す写本で、上記の写本とはかなり異なっている。

⁴⁷ 行数はいずれもトラップの刊本による。

ほぼ同じになり、両者の差は異本Zにのみ見られる追記部分の多さに由来すると説明することができよう。ところで、ここに本来のエピソードとみなされたE2、E3、E5、E6、E8はロシア語テキストに残る五つのエピソードと一致するものである。そこで、これら五つのエピソードが各写本に占める割合を以下にパーセンテージで示し（表2）、量的な観点から捉えてみたい。

表2⁴⁸

	Gr	Z	E	X'
1) アミラスの物語	24.8	27.8	34	35
2) 幼き頃のディゲニス	6.9	6.5	3.9	12.6
3) フィロパプとマクシモ	9.0	8.7	10.0	11.2
4) ストラティゴヴナ誘拐	19.4	14.4	15.9	29.6
5) 皇帝とのエピソード	3.3	2.3	—	11.4

この図ではギリシャ語テキストに関しては五つのエピソード以外も含まれているために全体が100%になっていない。そこでこれを五つのエピソード以外を全て切り捨て、作成し直したものが次に示す表3である。

表3

	Gr	Z	E	X'
1)	39.1	46.6	54.1	35.0
2)	10.9	10.9	6.2	12.6
3)	14.2	14.6	15.9	11.2
4)	30.6	24.1	25.3	29.6
5)	5.2	3.9	—	11.4

この図の中で5)のエピソードに関してロシア語テキストとギリシャ語テキストの間で大きな隔たりがあるのは、このエピソードの展開が両者の間で大きく異なり、ギリシャ語テキストではむしろこのエピソードの印象を薄めようという方向に動いた結果とも見ることもできよう⁴⁹。しかし、それよりも注目す

⁴⁸ エピソードの登場順序はロシア語のテキストに従った。

⁴⁹ グレゴワールはこのエピソードが本来の物語にあったにもかかわらず、ギリシャ語テキストでは異なる展開になったのは中央政府を慮った後代の編集者による書き換えの結果であろうと考える。cf. Grégoire, *Digenes Akritas*, 72-74.

べき点は1)と4)のエピソードの全体に占める割合の大きさと、いずれのテキストにおいてもこの二つのエピソードで物語全体の60-70%を占めている。量的な観点からの比較結果はこれら二つのエピソードが明らかに物語の中心テーマとなっているを示すものと考えられよう。

1)のエピソードすなわち物語の第一部がアミラスによる花嫁略奪の物語に他ならないことは上述した通りであるが、2)から5)のエピソードも中心はディゲニスによる花嫁略奪とその導入にあたるフィリパパとマクシモのエピソードであると考えられよう。すなわち、アミラスとディゲニスをそれぞれの主人公とする二つの花嫁略奪の物語が<ディゲニス物語>の核をなしていると言える。それまで口承の物語として存在していたディゲニスを中心とするエピソードのうち、花嫁略奪をテーマとするエピソードを中心に据えて、それにその主人公となるディゲニスの誕生、幼児期の偉業、終末というエピソードを加えることで英雄物語としての体裁を備えた記述文学として誕生したのが我々の扱う<ディゲニス物語>ということになる⁵⁰。言い換えると、<ディゲニス物語>とはビザンツとアラブが共存していた国境周辺における英雄の姿を、中央と地方の対立の先鋭化という時代背景の中で、彼らの生活形態、風習の中でとりわけ重要な位置を占めていた花嫁略奪を中心テーマとして描いた英雄叙事詩であると言えるのではなかろうか。そしておそらくその成立の初期の段階では、ロシア語テキストの示すように、それぞれ独立したエピソードが年代記風に並べられていたと推察されるのである。

⁵⁰ エントウィスルもその論文の中でこの二つの略奪結婚のエピソードが<ディゲニス物語>の中心的テーマを成すと考えている。また、キリアキディスもこの二つのエピソードをロシア語テキストの基本的エピソードとして指摘する。W.J.Entwistle, "Bride-snatching and the Deeds of Digenis", 1-16, S.Kyriakides, "Forschungsbericht zum Akrites Epos", 14.